

アムド・チベット語における形態音韻的な交替現象

海老原 志穂

1 はじめに

アムド・チベット語は中国青海省の全域、甘粛省と四川省の一部で話されている。この言語では接辞⁽¹⁾、助詞、助動詞が名詞や動詞などの語幹に付加される際、音韻的な環境によって形態音韻的な交替をおこすという現象がみられる。

以下に同現象に関する例をいくつか示す。「状態、属性」を表す助動詞 {=Gə}⁽²⁾には =kə と =gə という 2 つの交替形がある。名詞や動詞などの語幹末尾が /p/, /k/, /l/ のいずれかで終わる場合には {=Gə} が =kə で現れる (例は (1))。語幹末尾がそれ以外の環境 (末尾が /m/, /n/, /ŋ/, /r/, 母音) の場合には =gə で現れる (例は (2), (3))。

- (1) tɕʰok=kə 「してもよい」
 してもよい =AUX
- (2) maŋ=gə 「多い」
 多い =AUX
- (3) tʰo=gə 「高い」
 高い =AUX

ただし、助動詞だけでなく、語幹も交替することがある。語幹末尾が単独で /p/ または /l/ で終わる場合に助動詞 =kə が後続すると、語幹末尾の /p/, /l/ が /k/ に交替する (例は (4), (5))。

- (4) nbek=kə 「降る」
 降る : NPST=AUX
 (/nbek/ は動詞 /nbep/ 「降る」の末子音 /p/ が /k/ に交替したものである)
- (5) jok=kə 「ある」
 ある =AUX
 (/jok/ は動詞 /jol/ 「ある」の末子音 /l/ が /k/ に交替したものである)

交替形が 3 つ以上存在する場合もある。「譲歩、逆接」を表す接続助詞 {=Rəŋ} は =rəŋ, =toŋ, =ndəŋ という 3 つの交替形をもつ。語幹の末尾が単独で /l/ または /r/ で終わる場合には =toŋ が後続する (例は (6), (7))。さらに、これらの場合には語幹末尾の子音 /l/, /r/ が /t/ に交替する。語幹末尾が /n/ で終わる場合には =ndəŋ が後続する (例は (8))。それ以外の場合には =rəŋ が後続する (例は (9), (10))。

——アムド・チベット語における形態音韻的な交替現象——

- (6) met=ton 「ないが」
ない = CONJ
(/met/ は動詞 /mel/ 「ない」の末子音 /l/ が /t/ に交替したものである)
- (7) tɕ^het=ton 「持って行ったが」
持って行く = CONJ
(/tɕ^het/ は動詞 /tɕ^her/ 「持って行く」の末子音 /r/ が /t/ に交替したものである)
- (8) jən=ndon 「であるが」
COP=CONJ
- (9) wap=ron 「降ったが」
降る : PAST=CONJ
- (10) ti=ron 「書いたが」
書く : PAST=CONJ

接辞や助詞、助動詞の頭子音が交替するという現象は、「三十頌」(*sum cu pa*⁽³⁾)などにみられるチベット文語⁽⁴⁾の助辞類の連辞規則⁽⁵⁾に類似している。例えば、属格助辞 (*'brel sgra*) には *gyi*, *kyi*, *gi 'i*, *yi* という5つ交替形が存在し、以下のような環境でそれぞれの交替形が現れる。例文はいずれもロサン (1992, 79–80) からの引用である。

【表1】属格助辞 (*'brel sgra*) の交替

語幹末尾	-n, -m, -r, -l	-d, -b, -s	-g, -ng	-'a, -Ø ⁽⁶⁾
交替形	<i>gyi</i>	<i>kyi</i>	<i>gi</i>	<i>'i</i> または <i>yi</i>
例文	(11)	(12)	(13)	(14), (15)

- (11) *dom gyi* 「熊の」
熊 GEN
- (12) *skad kyi* 「声の」
声 GEN
- (13) *khong gi* 「彼の」
彼 GEN
- (14) *nga'i* 「私の」
私 GEN
- (15) *nga yi* 「私の」
私 GEN

ただし、アムド・チベット語における交替の具体的規則は、チベット文語の連辞規則とかなり異なっており、その点が非常に興味深い。本稿では青海省海南チベット族自治州共和県におけるアムド・チベット語のデータを用い、形態音韻的な交替現象の全体像を記述し、最後に、チベット文語との比較を通じてその特徴を明らかにしたい。

2 データと先行研究

アムド・チベット語は中国青海省の全域、甘肅省と四川省の一部で話されている。



図1 青海省とその周辺（黒塗りの部分が共和県）

現地調査⁽⁷⁾は2005年から2007年の間に青海省海南チベット族自治州共和県チャブチャ鎮において行った。

アムド・チベット語に関する先行研究の中には、形態音韻的な交替現象についての記述がみられるものもある（敏生智 1990, 格桑居冕・格桑央京 2002, 周毛草 2003, Haller 2004）。しかし、この交替現象の全体像を扱った研究は未見である。なお本稿では詳細を示さないが、これらの先行研究と本稿のデータを比べると、アムド・チベット語の中でも形態音韻的な交替現象は各方言によって多少異なる。

3 各交替形のパターン

接辞、助詞、助動詞の交替は語幹を単独で発話した際の末尾の音素によってほぼ規則的にきまる。各環境において現れる交替形はその頭子音（単独の子音の場合もあれば子音連続の場合もある）が交替する。さらに、場合によっては語幹末尾が交替することもある。この音変化は、単独で現れた場合に、語幹末尾が /p/, /l/, /r/ のいずれかで終わる場合におこる。特に、語幹末尾の /l/ は多くの環境で交替がおこる。語幹末尾の /p/ および /r/ は、/l/ に比べ、それほど多くの環境では交替がおこらない。

以下の §3.1–§3.5 では、交替形の頭子音のパターンによる分類と各パターンに属する接辞、助詞、助動詞の例文を示す。ただし、同じ交替パターンに属するものが複数ある場合には、代表としてそのうちの1つの接辞、助詞、助動詞の交替のみを示す。例文を示していない要素の交替現象については海老原（2008）を参照していただきたい。

§3.1/tɕ~dz/ の交替

§3.2/k~g/ の交替

§ 3.3 /r~t~nd/ の交替

§ 3.4 /s^h~ts^h/ と /z~ts/ の交替

§ 3.5 語幹末尾への同化

ただし、頭子音の交替パターンが同じであっても、交替環境が異なる場合や、語幹の交替の有無が異なる場合がある。

アムド・チベット語では、音節の末尾にたつことのできる音素に、/p/, /k/, /m/, /n/, /ŋ/, /l/, /r/, 母音がある。したがって、これらの環境における交替形の現れ方を示していく。

3.1 /tɕ~dz/ の交替

頭子音が /tɕ~dz/ の交替をするものには、「未来」を表す助動詞 {=Dzijən} (縮約形 {=Dzi}) と {=Dzirel}, そして、名詞化接辞 {-Dzo} がある。表中では交替形の頭子音のみを示す。/tɕ/ と /dz/ どちらも出現可能な場合もある (表中では 'tɕ or dz' と示す)。

なお、表中の () 内には語幹末尾の交替を記す。(l → t) とは語幹末尾の /l/ が /t/ に交替することを、(p → p/t) とは語幹末尾の /p/ が交替しない場合と /t/ に交替する場合があることを表す。

【表 2】 /tɕ~dz/ の交替

語幹末尾	-p	-k	-m	-n	-ŋ	-l	-r	-Ø
助動詞 {=Dzijən}	tɕ (p → p/t)	dz	dz	dz	dz	tɕ (l → t)	dz	dz
助動詞 {=Dzirel}	tɕ (p → p/t)	dz	dz	dz	dz	tɕ (l → t)	dz	dz
名詞化接辞 {-Dzo}	tɕ or dz	dz	dz	dz	dz	tɕ (l → t)	dz	dz

「未来」を表す助動詞 {=Dzijən} (縮約形 {=Dzi}) の例を示す。この助動詞には、=tɕijən (=tɕi), =dzijən (=dzi) という交替形がある。語幹末尾が /p/, /l/ の場合には =tɕijən (=tɕi) が現れる。ただし、=tɕijən (=tɕi) が現れる場合、語幹末尾も /t/ に交替することがある (例は (16), (17))。それ以外の環境では =dzijən (=dzi) が現れる (例は (18)–(23))。

- (16) nbet = tɕi / nbep = tɕi 「降りる」
 降りる：NPST=AUX 降りる：NPST=AUX
 (/nbet/ は動詞 /nbep/ 「降りる」の末子音 /p/ が /t/ に交替したものである)
- (17) nbət = tɕi 「出る」
 出る：NPST=AUX
 (/nbət/ は動詞 /nbəl/ 「出る」の末子音 /l/ が /t/ に交替したものである)
- (18) ndək = dzi 「いる」
 いる：NPST=AUX
- (19) ndem = dzi 「選ぶ」
 選ぶ = AUX

—アムド・チベット語における形態音韻的な交替現象—

- (20) len=dzi 「取る」
取る：NPST=AUX
- (21) joŋ=dzi 「来る」
来る =AUX
- (22) tɕ^her=dzi 「持っていく」
持っていく =AUX
- (23) ndzo=dzi 「行く」
行く：NPST=AUX

3.2 /k~g/ の交替

頭子音が /k~g/ の交替をするものには、「状態、属性」を表す助動詞 {=Gə}, 「進行、習慣」を表す助動詞 {=Gəjol} と {=Gəjokkə} (縮約形 {=Gokə}), そして、「目的、使役、付帯状況」を表す接続助詞 {=Gə} がある。

【表3】 /k~g/ の交替

語幹末尾	-p	-k	-m	-n	-ŋ	-l	-r	-Ø
助動詞 {=Gə}	k (p → p/k)	k	g	g	g	k (l → k)	g	g
助動詞 {=Gəjol}	k (p → p/k)	k	g	g	g	k (l → k)	g	g
助動詞 {=Gəjokkə}	k (p → p/k)	k	g	g	g	k (l → k)	g	g
接続助詞 {=Gə}	k	k	g	g	g	k (l → l/k)	g	g

「進行、習慣」を表す助動詞 {=Gəjokkə} (縮約形 {=Gokə}) の交替を示す。{=Gəjokkə} には =gəjokkə (=gokə) と =kəjokkə (=kokə) という交替形が存在する。語幹末尾が /p/, /l/, /r/ の場合、=kəjokkə (=kokə) が現れる (例は (24)–(26))。語幹末尾の /p/ は =kəjokkə (=kokə) が後続すると /k/ に交替することがある (例は (24))。語幹末尾の /l/ は =kəjokkə (=kokə) が後続すると /k/ に交替する (例は (26))。それ以外の環境では =gəjokkə (=gokə) が現れる (例は (27)–(31))。

- (24) hek=kokə / hep=kokə 「いらっしゃっている」
いらっしゃる =AUX いらっしゃる =AUX
(/hek/ は動詞 /hep/ 「いらっしゃる」の末子音 /p/ が /k/ に交替したものである)
- (25) ndək=kokə 「合っている」
合う =AUX
- (26) jek=kokə 「している」
する：NPST=AUX
(/jek/ は動詞 /jel/ 「する」の末子音 /l/ が /k/ に交替したものである)
- (27) ndem=gokə 「選んでいる」
選ぶ =AUX

- (28) t^hen = gokə 「引いている」
引く = AUX
- (29) jon = gokə 「来ている」
来る = AUX
- (30) tɕ^her = gokə 「運んでいる」
運ぶ = AUX
- (31) li = gokə 「つくっている」
つくる = AUX

3.3 /r~t~nd/ の交替

頭子音が /r~t~nd/ の交替をするもの⁽⁸⁾には、「命令」を表す文末助詞 {=Ra}, 「～した時, ～している時」接続助詞 {=Rit^hats^ho}, 「～も, ～と」を表す談話助詞 {=Ra}, 「～したばかりの時」を表す接続助詞 {=Ron}, 「譲歩, 逆接」を表す接続助詞 {=Ronkonja}, 「逆接」を表す接続助詞 {=Ra} がある。一は, 該当する例がみつからなかったことを表す。

【表 4】 /r~t~nd/ の交替

語幹末尾	-p	-k	-n	-m	-ŋ	-l	-r	-Ø
文末助詞 {=Ra}	r	r	nd, or r	nd, or r	nd, or r	$\begin{smallmatrix} t \\ (l \rightarrow t) \end{smallmatrix}$	$\begin{smallmatrix} t \\ (r \rightarrow t) \end{smallmatrix}$	r
接続助詞 {=Rit ^h ats ^h o}	r	r	nd, or r	r	nd, or r	$\begin{smallmatrix} t \\ (l \rightarrow t) \end{smallmatrix}$	$\begin{smallmatrix} t \\ (r \rightarrow t) \end{smallmatrix}$	r
談話助詞 {=Ra}	r	r	nd	r	r	$\begin{smallmatrix} t(l \rightarrow l/t) \\ \text{or } r \end{smallmatrix}$	$\begin{smallmatrix} t(r \rightarrow r/t) \\ \text{or } r \end{smallmatrix}$	r
接続助詞 {=Ron}	r	r	nd	r	r	$\begin{smallmatrix} t \\ (l \rightarrow t) \end{smallmatrix}$	$\begin{smallmatrix} t \\ (r \rightarrow t) \end{smallmatrix}$	r
接続助詞 {=Ronkonja}	r	r	nd	r	r	$\begin{smallmatrix} t \\ (l \rightarrow t) \end{smallmatrix}$	$\begin{smallmatrix} t \\ (r \rightarrow t) \end{smallmatrix}$	r
接続助詞 {=Ra}	—	—	nd	—	—	$\begin{smallmatrix} t \\ (l \rightarrow t) \end{smallmatrix}$	—	r

接続助詞 {=Rit^hats^ho} (縮約形 {=Ri}) には, =tj^hats^ho (=ti) と =ndj^hats^ho (=ndji), =rit^hats^ho (=ri) という 3 つの交替形がある。語幹末尾が /l/, /r/ の場合, =tj^hats^ho (=ti) が現れる (例は (32), (33))。この場合, 語幹末尾の /l/, /r/ は /t/ に交替する。語幹末尾が /n/, /ŋ/ の場合, =ndj^hats^ho (=ndji) が現れる (例は (34), (35))。それ以外の環境では =rit^hats^ho (=ri) が現れる (例は (36)–(39))。

- (32) joɬ = tj^hats^ho 「あった時に」
ある = CONJ
(/joɬ/ は動詞 /jol/ 「ある」の末子音 /l/ が /t/ に交替したものである)
- (33) k^həɬ = tj^hats^ho 「担いだ時に」
担ぐ = CONJ
(/k^həɬ/ は動詞 /k^hər/ 「担ぐ」の末子音 /r/ が /t/ に交替したものである)

—アムド・チベット語における形態音韻的な交替現象—

- (34) $\text{toma jən} = \text{ndj}^{\text{h}}\text{ats}^{\text{h}}\text{o}$ / $\text{toma jən} = \text{rit}^{\text{h}}\text{ats}^{\text{h}}\text{o}$ 「学生であった時に」
 学生 COP = CONJ 学生 COP = CONJ
- (35) $\text{joŋ} = \text{ndj}^{\text{h}}\text{ats}^{\text{h}}\text{o}$ / $\text{joŋ} = \text{rit}^{\text{h}}\text{ats}^{\text{h}}\text{o}$ 「来た時に」
 来る = CONJ 来る = CONJ
- (36) $\text{hep} = \text{rit}^{\text{h}}\text{ats}^{\text{h}}\text{o}$ 「いらっしゃった時に」
 いらっしゃる = CONJ
- (37) $\text{ndək} = \text{rit}^{\text{h}}\text{ats}^{\text{h}}\text{o}$ 「いた時に」
 いる : NPST = CONJ
- (38) $\text{ndzom} = \text{rit}^{\text{h}}\text{ats}^{\text{h}}\text{o}$ 「集まった時に」
 集まる = CONJ
- (39) $\text{ndzo} = \text{rit}^{\text{h}}\text{ats}^{\text{h}}\text{o}$ 「行った時に」
 行く : NPST = CONJ

3.4 /s^h~ts^h/ と /z~ts/ の交替

頭子音が /s^h~ts^h/ の交替をするものには、「場所」を表す名詞化接辞 {-S^ho}, 「完遂, 事態の生起, 想定を超えた事態」を表す助動詞 {=S^hoŋ} がある。頭子音が /z~ts/ の交替をするものには、「推察, 伝聞」を表す助動詞 {=Zək} がある。

【表 5】 /s^h~ts^h/ と /z~ts/ の交替

語幹末尾	-p	-k	-m	-n	-ŋ	-l	-r	-∅
名詞化接辞 {-S ^h o}	s ^h	s ^h	s ^h	s ^h	s ^h	ts ^h (l → t) or s ^h (l → s)	s ^h	s ^h
助動詞 {=S ^h oŋ}	s ^h	s ^h	s ^h	s ^h	s ^h	ts ^h (l → t) or s ^h (l → s)	s ^h	s ^h
助動詞 {=Zək}	z	z	z	z	z	ts (l → t)	z	z

「完遂, 事態の生起, 想定を超えた事態」を表す助動詞 {=S^hoŋ} には, =s^hoŋ と =ts^hoŋ という2つの交替形がある。=s^hoŋ は全ての環境で現れることができるが, =ts^hoŋ は語幹が /l/ で終わる時にのみ現れる (例は (40))。その場合, 語幹末尾の /l/ は /t/ に交替する。語幹末尾の /l/ に =s^hoŋ が後続する場合には, /l/ は /s/ に交替する。

- (40) $\text{met} = \text{ts}^{\text{h}}\text{oŋ}$ / $\text{mes} = \text{s}^{\text{h}}\text{oŋ}$ 「無くなった, 亡くなった」
 ない = AUX ない = AUX
 (/met/ は動詞 /mel/ 「ない」の末子音 /l/ が /t/ に交替し, /mes/ は動詞 /mel/ 「ない」の末子音 /l/ が /s/ に交替したものである)
- (41) $\text{ndəp} = \text{s}^{\text{h}}\text{oŋ}$ 「成就した」
 成就する = AUX
- (42) $\text{lok} = \text{s}^{\text{h}}\text{oŋ}$ 「変わった」
 変わる = AUX

——アムド・チベット語における形態音韻的な交替現象——

- (43) ndzom = s^hoŋ 「まとまった」
まとまる = AUX
- (44) lon = s^hoŋ 「達した」
達する = AUX
- (45) kaŋ = s^hoŋ 「満ちた」
満ちる = AUX
- (46) ts^har = s^hoŋ 「終わった」
終わる = AUX
- (47) ko = s^hoŋ 「わかった」
わかる = AUX

「推察, 伝聞」を表す助動詞 {=Zək} には =zək と =tsək という 2 つの交替形がある。=tsək は語幹末尾が /l/ の場合のみに現れ, その他の環境では =zək が現れる。=tsək が現れる場合, 語幹末尾の /l/ は /t/ に交替する。

- (48) ɕet = tsək 「話した」
話す = AUX
(/ɕet/ は動詞 /ɕel/ 「話す」の末子音 /l/ が /t/ に交替したものである)
- (49) hep = zək 「いらっしゃった」
いらっしゃる = AUX
- (50) zək = zək 「させた」
させる : PAST = AUX
- (51) htsem = zək 「執筆した」
執筆する = AUX
- (52) t^hon = zək 「着いた」
着く = AUX
- (53) t^hoŋ = zək 「飲んだ」
飲む = AUX
- (54) ngor = zək 「過ぎた」
過ぎる = AUX
- (55) li = zək 「した」
する = AUX

3.5 語幹末尾への同化

頭子音の一部が語幹末尾に (完全または不完全に) 同化するものには, 「動作連続, 付帯状況」を表す接続助詞 {=Ni}, {=Na}, 「発話者視点」を表す助動詞 {=Ca}, 与格助詞 {=Ca} がある。

{=Ni} と {=Na} の 'N' は鼻音 (Nasal) を, {=Ca} の 'C' は不特定の子音 (Consonant) を表す。

——アムド・チベット語における形態音韻的な交替現象——

【表 6】 語幹末尾への同化

語幹末尾	-p	-k	-m	-n	-ŋ	-l	-r	-Ø
接続助詞 {=Ni}	Ø (w ← p)	Ø	Ø	n	ŋ	Ø	Ø	Ø
接続助詞 {=Na}	Ø (w ← p)	Ø	Ø	n	ŋ	Ø	Ø	Ø
助動詞 {=Ca}	w or Ø (w ← p)	Ø	Ø	n	ŋ	Ø	Ø	Ø
格助詞 {=Ca}	w or Ø (w ← p)	k or Ø	m or Ø	n	ŋ	Ø	Ø	Ø

「動作連続, 付帯状況」を表す接続助詞 {=Ni} は語幹末尾が /n/ で終わる場合には =ni で現れ (例は (56)), 語幹末尾が /ŋ/ で終わる場合には =ŋi で現れる (例は (57))。それ以外の場合には =i で現れる (例は (58)–(63))。ただし, 語幹末尾が /p/ で終わる場合には /p/ は =i の前で /w/ に交替する (例は (58))。

- (56) t^hon=ni 「到着して」
到着する =CONJ
- (57) s^hoŋ=ŋi 「行って」
行く : PAST=CONJ
- (58) ndəw=i 「成就して」
成就する =CONJ
(/ndəw/ は動詞 /ndəp/ 「成就する」の末子音 /p/ が /w/ に交替したものである)
- (59) dzək=i 「走って」
走る =CONJ
- (60) dem=i 「結んで」
結ぶ =CONJ
- (61) tɕ^her=i 「運んで」
運ぶ =CONJ
- (62) tɕ^hel=i 「連れて行って」
連れて行く =CONJ
- (63) hti=i 「見て」
見る : PAST=CONJ

与格助詞 {=Ca} は, 語幹末尾が /p/ で終わる場合には =wa または =a で現れる。=a で現れる場合には, =a の前で語幹末尾の /p/ が /w/ に交替する (例は (64))。語幹末尾が /k/ で終わる場合には =a または =ka で現れる (例は (65))。語幹末尾が /m/ で終わる場合には =a または =ma で現れる (例は (66))。語幹末尾が /n/ で終わる場合には =na で現れ (例は (67)), 語幹末尾が /ŋ/ で終わる場合には =ŋa で現れる (例は (68))。それ以外の場合には =a のみで現れる (例は (69)–(72))。語幹が母音で終わる場合には与格助詞自体が現れないこともある (例は (73))。

「発話者視点」を表す助動詞 {=Ca} もこれと似た交替を示すが, 表 6 に示すように, 語幹末

—アムド・チベット語における形態音韻的な交替現象—

尾が /k/, /m/ であっても =Ø で現れる。

- | | | | | |
|------|---------------------------------------|---|------------------------|--------------|
| (64) | tonɕəp = wa | / | tonɕəw = a | 「トンドユブに」 |
| | PSN = DAT | | PSN = DAT | |
| (65) | htɕək = ka | / | htɕək = a | 「1 つに, 1 人に」 |
| | 1 = DAT | | 1 = DAT | |
| (66) | sem = ma | / | sem = a | 「心に」 |
| | 心 = DAT | | 心 = DAT | |
| (67) | s ^h emtɕen = na | | | 「生物に」 |
| | 生物 = DAT | | | |
| (68) | taŋ = ŋa | | | 「共産党に」 |
| | 共産党 : Ch. = DAT | | | |
| (69) | t ^h emtɕel = a | | | 「全てに」 |
| | 全て = DAT | | | |
| (70) | mar = a | | | 「下に」 |
| | 下 = DAT | | | |
| (71) | ŋa = a | | | 「私に」 |
| | 1SG = DAT | | | |
| (72) | rənpotɕ ^h e = a | | | 「リンポチェに」 |
| | リンポチェ = DAT | | | |
| (73) | ʎas ^h a = Ø ⁽⁹⁾ | | s ^h oŋ = ŋi | 「ラサに行って」 |
| | PLN | | 行く : PAST = CONJ | |

4 考察

以上, アムド・チベット語における各接辞, 助詞および助動詞の交替を観察した。交替には, 接辞, 助詞および助動詞の頭子音の交替 (§ 4.1) と, 語幹末尾の交替 (§ 4.2) がみられる。以下ではこの 2 点をチベット文語との比較を行いながらまとめる。

4.1 接辞, 助詞および助動詞の頭子音の交替

§ 3 で述べた, 接辞, 助詞および助動詞の交替形の頭子音のパターン (§ 3.1 /tɕ~dz/ の交替, § 3.2 /k~g/ の交替, § 3.3 /r~ʎ~nd/ の交替, § 3.4 /s^h~ts^h/ と /z~ts/ の交替, § 3.5 語幹末尾への同化) は, 音声的特徴からは, 以下のようにまとめることができる。

- ・有声音-無声音の交替 : /tɕ~dz/, /k~g/, /z~ts/⁽¹⁰⁾
- ・/r/ とそり舌音の交替 : /r~ʎ~nd/
- ・摩擦音と破擦音の交替 : /s^h~ts^h/, /z~ts/
- ・語幹末尾への同化 : /n~ŋ~Ø/, /w~n~ŋ~Ø/, /w~k~m~n~ŋ~Ø/

——アムド・チベット語における形態音韻的な交替現象——

アムド・チベット語でみられるこれらの交替規則はほとんどがチベット文語の交替規則（附録1を参照）とは異なっている。ただし、語幹末尾への同化はチベット文語の 'am や 'o にみられる交替（附録1の表13, 表14）と類似している。

4.2 語幹の交替について

アムド・チベット語は語幹も交替⁽¹¹⁾をおこす点においてチベット文語と大きく異なる。具体的に述べると、語幹末尾が後続の音素に（完全または不完全）同化をおこして交替する。語幹の交替を(74)に示す。交替をおこすのは、末子音の /p/, /l/, /r/ である⁽¹²⁾。以下にその交替規則をまとめる。（ ）内は交替のおこる環境を記した。

(74) 語幹末尾の交替規則

- ・ /p/ → /t/ (/tɕ/ の前), /k/ (/k/ の前), /w/ (/a/, /i/ の前)
- ・ /l/ → /t/ (/ts/, /tɕ/ の前), /t/ (/t/ の前),
/k/ (/k/ の前), /s/ (/s/ の前)
- ・ /r/ → /t/ (/t/ の前)

ただし、語幹の交替は、同じ音韻的条件下においてもおこる場合とおこらない場合があり、接辞や助詞、助動詞の交替に比べると交替を予測することが難しいと考えられる。

チベット文語にはみられないこの語幹の交替は、アムド・チベット語で特に観察されるものであり、非常に興味深い現象である。この交替が何に起因して起こったものかについては今後とも考察の余地がある。

5 今後の課題

本稿では青海省海南チベット族自治州共和県で話されるアムド・チベット語における形態音韻的な交替現象を扱ったが、同様の交替現象は、アムド・チベット語の他の方言にもみられる。さらに、このような交替はアムド・チベット語の他に、ラダックで話されるチベット語にもみられる（Koshal 1979, 34-39）。今後はこの交替現象に関して、アムド・チベット語の方言間および他地域のチベット語との比較を行い、チベット語内部での通時的な言語変化を考える端緒としたい。

略号表

-	Affix boundary
=	Clitic boundary
AUX	Auxiliary verb
Ch.	Chinese
CONJ	Conjunction
COP	Copula
DAT	Dative case marker
GEN	Genitive

——アムド・チベット語における形態音韻的な交替現象——

NPST	Non-past
PAST	Past
PLN	Place name
PSN	Person name

文献表

Beyer, S.

1992 *The Classical Tibetan Language*. Albany, New York: State University of New York Press.

DeLancey, S.

2003 “Classical Tibetan.” In *The Sino-Tibetan Languages*. (Routledge Language Family Series). Eds. T. Graham and R. J. Lapolla. London and New York: Routledge. pp. 255–269.

海老原 志穂

2008 「青海省共和県のチベット語アムド方言」博士論文，東京大学大学院人文社会系研究科。

Ebihara, S.

2008 “Morphophonological Alternation of Suffixes and Clitics in the Amdo Dialect of Tibetan”, presented in the 14th Himalayan Languages Symposium, University of Gothenburg, Sweden 21–23 August 2008.

格桑居冕・格桑央京

2002 『蔵語方言概論』北京，民族出版社。

Haller, F.

2004 *Dialekt und Erzählungen von Themchen: Sprachwissenschaftliche Beschreibung eines Nomadendialektes aus Nord-Amdo*. Bonn: VGH Wissenschaftsverlag.

sKal bzang 'Gyur med

1981 *Bod kyi brda sprod rig pa'i khrid rgyun rab gsal me long*. Chendu: Si khron mi rigs dpe skrun khang.

Koshal, S.

1979 *Ladakhi Grammar*. Delhi etc.: Motilal Banarsidass.

Lass, R.

1984 *Phonology: an Introduction to Basic Concepts*. Cambridge : Cambridge University Press.

ロサン, T.

1992 『現代チベット語会話』Vol. 1, 石濱裕美子・ケルサントウワ訳，国際語学社。

敏生智

1990 『安多蔵語常用虚詞积例』西寧，青海民族出版社。

山口 瑞鳳

1998 『チベット語文語文法』春秋社。

周毛草

2003 『瑪曲蔵語研究』北京，民族出版社。

附録 1 チベット文語の連辞規則

以下のチベット文語の連辞規則は *sKal bzang 'Gyur med* (1981), Beyer (1992), 山口 (1998) を参考にしてまとめた。

【表 7】 *'brel sgra, byed sgra*

語幹末尾	<i>n, m, r, l</i>	<i>d, b, s</i>	<i>g, ng</i>	<i>'a, Ø</i>
交替形	<i>gyi</i> <i>gyis</i>	<i>kyi</i> <i>kyis</i>	<i>gi</i> <i>gis</i>	<i>'i or yi</i> <i>'is or yis</i>

【表 8】 *tshig phrad*

語幹末尾	<i>d, b, s</i>	<i>g, ng</i>	<i>n, m, r, l</i>	<i>'a, Ø</i>
交替形	<i>kyin</i>	<i>gin</i>	<i>gyin</i>	<i>yin, (gin)</i>

【表 9】 *rgyan sdud kyi sgra*

語幹末尾	<i>g, d, b, s</i>	<i>ng, n, m, r, l</i>	<i>'a, Ø</i>
交替形	<i>kyang</i>	<i>yang</i>	<i>'ang or yang</i>

【表 10】 *lhag bcas kyi sgra*

語幹末尾	<i>g, ng, b, m, 'a, Ø</i>	<i>d</i>	<i>n, r, l, s</i>
交替形	<i>ste</i>	<i>de</i>	<i>te</i>

【表 11】 *tshig phrad*

語幹末尾	<i>s</i>	<i>g, d, b</i>	<i>ng, n, m, r, l, 'a, Ø</i>
交替形	<i>shing</i> <i>shes</i> <i>she na</i> <i>shig</i>	<i>cing</i> <i>ces</i> <i>ce na</i> <i>cig</i>	<i>zhing</i> <i>zes</i> <i>zhe na</i> <i>zhig</i>

【表 12】 *la don*

語幹末尾	<i>s</i>	<i>g, b</i>	<i>ng, d, n, m, r, l</i>	<i>'a, Ø</i>
交替形	<i>su</i>	<i>tu</i>	<i>du</i>	<i>-r or ru</i>

(la と na はいずれの環境でも出現可能)

【表 13】 *'byed sdud kyi sgra*

語幹末尾	<i>g</i>	<i>ng</i>	<i>d</i>	<i>n</i>	<i>b</i>	<i>m</i>	<i>r</i>	<i>l</i>	<i>s</i>	<i>'a, Ø</i>
交替形	<i>gam</i>	<i>ngam</i>	<i>dam</i>	<i>nam</i>	<i>bam</i>	<i>mam</i>	<i>ram</i>	<i>lam</i>	<i>sam</i>	<i>'am</i>

【表 14】 *rdzogs tshig gi sgra*

語幹末尾	<i>g</i>	<i>ng</i>	<i>d</i>	<i>n</i>	<i>b</i>	<i>m</i>	<i>r</i>	<i>l</i>	<i>s</i>	<i>'a, Ø</i>
交替形	<i>go</i>	<i>ngo</i>	<i>do</i>	<i>no</i>	<i>bo</i>	<i>mo</i>	<i>ro</i>	<i>lo</i>	<i>so</i>	<i>'o</i>

附録 2 音節構造と音素目録

音節構造

(C1) (C2) (C3) V (C4)

音素目録

38 の子音音素と 7 つの母音音素を設定することが可能である。

【表 15】 子音音素

	bilabial/ labiodental	alveolar	retroflex	alveolo- palatal	palatal	velar	uvular	glottal
stop	p[p] p ^h [p ^h] b[b]	t[t] t ^h [t ^h] d[d]	ʈ[ʈ] ʈ ^h [ʈ ^h] ɖ[ɖ]			k[k] k ^h [k ^h] g[g]		
affricate		ts[ts] ts ^h [ts ^h] dz[dz]		tɕ[tɕ] tɕ ^h [tɕ ^h] dʒ[dʒ]				
fricative	f[f]	ʃ[ʃ], s[s], s ^h [s ^h], z[z]	ʂ[ʂ]	ɕ[ɕ] ʑ[ʑ]	ç[ç]		x[x]/[x ^w] ɣ[ɣ]/[ɣ ^w]	h[h]
nasal	m[m]	n[n]		ɳ[ɳ]		ŋ[ŋ]		
liquid		l[l], r[r]						
semi-vowel	w[w]					j[j]		

母音音素

/i/ [i] /y/ [y] /u/ [ʊβ]~[uu]

/e/ [ɛ] /ə/ [ə] /o/ [o]

/a/ [ʌ]

注

- (1) 接辞の中には、人を表す接辞 (-pa/-ba/-wa) のように、どの音形の接辞が選択されるかが共時的には予測できないものや、複数接辞 (-tɕ^ho/-tɕo/-zo) のようにいずれの環境でも自由変異として現れうるものもある。これらについては今回の考察の対象外とする。
- (2) 頭子音が形態音韻変化をする接辞、助詞および助動詞については、それらの基底形を設定する。この基底形は形態音素表記であるので、Lass (1984, 57) の表記法にしたがい、{ } に入れて表記する。交替形のうち、現れる環境が最も多いものを基底形とし、基底形の初頭子音は大文字で表記する。例文中では、実現した通りの形を音素表記で示す。
- (3) 斜体はチベット文字のワイリー転写表記であることを意味する。
- (4) 「チベット文語」という表現は非常に漠然とした表現であるが、本稿の中では「9 世紀以降に古典チベット語の諸規則が適用され、改変された書写語」という意味で「チベット文語」という言葉を用いたい。
- (5) DeLancey (2003, 258) はチベット文語の連辞規則について ‘[S]everal grammatical morphemes, presumably clitics, show alternations in the initial consonant depending on the final of the preceding word’ と述べている。
- (6) -∅ は後置字が後続しないことを表す。

——アムド・チベット語における形態音韻的な交替現象——

- (7) これまでの調査は、以下の助成によって可能となった：日本学術振興会科学研究費補助金 基盤研究 (S)「チベット文化圏における言語基層の解明—チベット・ビルマ系未記述言語の調査とシャンシュン語の解読」(2005–2008) (代表者 長野泰彦), 日本学術振興会科学研究費補助金 (特別研究員奨励費)「チベット語アムド方言の文法記述」(2005–2007)。
- (8) 接辞や助詞、助動詞の他に、コピュラ動詞 {Rel} も音韻交替をすることがある。前の要素の末尾が /l/ で終わる場合には *ɬel* が現れ、/n/ で終わる場合には *ndel* が現れる。ただし、いずれの環境でも *rel* が現れることが可能である。以下にコピュラ動詞 {Rel} の例を示す。{Rel} の末子音 /l/ は出現環境によって現れなかったり、後続する要素に同化して現れたりする。
- (a) *wot* *te.* / *wol* *re.* 「チベット人です」
チベット (人) COP チベット (人) COP
(/wot/ は名詞 /wol/ 「チベット (人)」の末子音 /l/ が /ɬ/ に交替したものである)
- (b) *dzənts^hen* *nde.* / *dzənts^hen* *re.* 「理由です」
理由 COP 理由 COP
- (c) *tonɖəp* *re.* 「トンドゥプです」
PSN COP
- (9) 移動の到達点を表す名詞 (句) は、通常、与格を伴って現れる。例えば, *ətajamen* 「ウタヤメン」という場所に向かうことを表す場合には, *ətajamen* = *na* (PLN = DAT) 「ウタヤメンに」と発話する。母音終わりの場合のみ, = $\emptyset$ で現れることがある。
- (10) /z~ts/ の交替は、有声音-無声音の交替でもあり摩擦音-破擦音の交替でもある。
- (11) 語幹の交替は北インドのラダックのチベット語にもみられる特徴である。(Koshal 1979, 34–35) : *khyod* + *kun* → *khyot* + *kun* ‘you’ (2PL), *čö* + *thub* + *pin* → *čö* + *thup* + *pin* ‘Had been able to do’, *čö* + *čug* + *šik* → *čö* + *čuk* + *šik* ‘Get done’, *sil* + *lə* + *phog* + *kək* → *sil* + *lə* + *phok* + *kək* ‘Had to read’.
- (12) 語幹末尾の /p/, /l/ の交替については、アムド・チベット語 Themchen 方言を扱った Haller (2004, 31–32) にも記述がある。

謝 辞

本稿は 14th Himalayan Languages Symposium (University of Gothenburg, Sweden, 21–23 August 2008) で行った口頭発表 (“Morphophonological alternation of suffixes and clitics in the Amdo dialect of Tibetan”) に一部訂正を加え、さらに発展させたものである。発表の際に Scott DeLancey 先生 (University of Oregon) および Nicolas Tournadre 先生 (University of Provence) に貴重なご意見を教示いただいた。また、この論文の草稿を査読してくださった先生のご意見も非常に有益であった。最後に、筆者の調査に辛抱強くお付き合いくださったアムド・チベット語の話者、故ロチ・ギャンツォ氏 (bLo gros rGya mtsho) とアラック・ジャイ氏 (A lag rGya ye) にこの場を借りて心より御礼申し上げたい。